

## 岡部ゼミ同窓会 2026.7.9

これからの同窓会は岡部朗一先生の誕生日茶話会となる。誕生日にふさわしく、先生の薫陶を受けたゼミ生の口からは「ロゴス、パトス、エトス」というレトリックの専門用語が出る、「今でも先生から指導を受け、真っ赤になったリサーチペーパーの原稿は捨てられない」とか、「オカベ・スピリットのおかげで私は教員生活を全うできた」というふうに、大学時代のゼミの一コマを彷彿させるような雰囲気漂った。今回の同窓会には東京の町田市から来たゼミ生もいれば、先生に会うのが実に48年ぶりというゼミ生もいる。合計で10名の参加者（先生を除く）は、74生が2名、76生が5名、79生が1名、81生が2名で、4つの学年に及ぶ。

同窓会は近況報告から始まる。最初は先生と同じ7月10日が誕生日のAさん。Aさんは癌で夫を亡くし、すでに2年たつが、最近少し落ち着いてきたという。同じ76生のBさんは尾張旭市に住むが、市にある唯一の大学は半分くらいが外国人と聞く。さらに、平針に免許書き換えに行った折も「外国人が増えた」という印象を強く持ったそうだ。この同窓会で会計を担当するCさんも近所に「外国人が増えた」と実感している一人だ。ただし、ひと頃は圧倒的に中国人が多かったが、今は中東からの「自転車に乗って働きに行く労働者」が多い。76生はもう二人いる。大学時代に先生に添削指導していただいた「リサーチペーパーは今でも捨てられない」というDさんがその一人。65歳になって初めて保育の世界に挑戦し、すでに3年たつがとても楽しいという。もう一人がEさん。今年5月に親友を病死で失った。姉妹のように仲の良かった友を失った悲しみは言語に絶する。だが、今では「どんな小さな出会いも大切にしたい」という気持ちになったという。

79生の参加者はFさん。最初は教職につくことにためらいを感じていたが「オカベ・スピリット」に背中を押され、中高一貫校で働き、今年3月で42年間の「教員生活」を全うした。Fさんも先生に指導を受けたリサーチペーパーの原稿は捨てられないと言う。教員在職中に英国および名古屋大学の大学院で研究した。5月からはウクライナ支援のNPOで理事を務め、今は大学でウクライナ語も学び始める。英語学習の応用編という。

81生は二人が参加した。Gさんは名古屋大学の教務で文系の留学生すべての担当者である。毎日が忙しいが、楽しいという。Hさんはブラザー工業で働く。大学時代に学んだ「ロゴス、パトス、エトス」が現場で役立つかどうか疑問であったが、スピーチをする場面は多いという。南アフリカに出張する計画があるが、やはりそこでもスピーチを行う予定があるという。

74生は二人が参加。Iさんは中学校で英語を教える予定が、地元四日市の小学校で勤める

ことになり、結局そこで36年間過ごした。最後の方ではいずれ小学校にも入って来る予定の「外国語活動」の研究校で、子どもたちを「コミュニケーション活動のツールとしての英語」に親しませることの工夫に専念できた。もう一人がJさん。大学の教員退職後、英国の政治コミュニケーションを研究している。

岡部先生と言えば『大統領の説得術』（講談社現代新書 1994年）を思い出すが、人類学者の渡辺靖さんは朝日新聞で「言葉によって相手を説得することは望むべくもなく…」と米国の現状に対する懸念を表明した。そして「まずは身のまわりの小さな実践を積み重ねてゆく」ことが重要だ、と提案する。この同窓会に当てはめれば、まさに今行っている「小さな出会いを大切に」に尽きる。岡部先生も今回の同窓会の感想を尋ねられると「ただ、ただ感銘！」と返事をし、「教師冥利に尽きる」とつけ加えられた。（文責 木村友保）



参加者：岩垂友美子、立藤幸代、大矢裕子、野口和枝、木村友保、宮崎やす江、鈴木稔子、高村寿子

高野葉子、岡部朗一先生、三輪愛子

モテット鶴舞公園にて